存在が普通の社会に

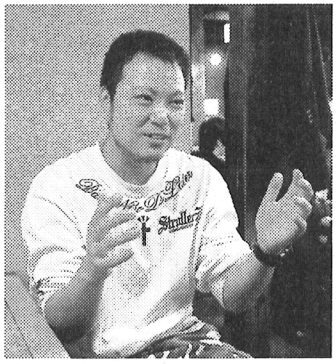
本当の自分

教育現場の性同一性障害

▶下

母校で勉強会を企画

NPO法人「性同一性障害支援機構」（東京都豊島区）の木部智輝さん(28)は、母校である県北部の公立中学校で「性同一性障害の勉強会」を企画した。まずは教員に理解を深めてもらうと、「身近に当事者がいることを知ってほしい」との思いからだ。



「特別なことじゃない。自分たちが当たり前に生きることができるようになってほしい」と願う木部智輝さん＝東京都内

木部さんも心と体の性が一致しない性同一性障害の当事者の一人。男性である自分が、女性の体に閉じ込められたような感覚に苦しんできた。2011年に性別適合手術を受け、戸籍を女性から男性に変えた。真っ平らな胸を前に、初めて「生きてて良かった」と思えた。「大多数の人にとっては当たり前のこと。だけど自分は21歳になってようやく、スタートラインに立てた」。手に入れたくて、ずっと届かなかった本当の自分になった。

中学2年のとき、友人から「男女（おとこおんな）」といじめられた。ノートをごみ箱に捨てられ、椅子を隠された。偏見を恐れ、誰にも打ち明けることができなかった。「無になりたい。マイナスよりゼロになって生まれ変わりたい」。自宅で練炭自殺をしようと考え、遺書に「自分にうそをつく生き方はしたくなかった」と書いたこともある。

「性同一性障害と公言しているくせに、意志が弱いやつが許せなかった」。23歳の時、インターネットの掲示板で知り合った知人を殴りつけた。傷害容疑で逮捕され、3カ月間、留置所で生活。狭い独房で自分の気持ちに向き合い、行動を省みた。

「みんなにとって当たり前のことは、自分にとって当たり前じゃない」「生きていくために苦しみがある」「自分の嫌いなところも人の役に立つなら、苦しみから優しさに変わる」―。ノートいっぱいに、思いをつづった。自分の考え方が間違いだと気付いた。

経験を重ねることで、「当事者に寄り添うことが自分の使命なのでは」と思うようになった。今、木部さんの元には当事者から多くの人生相談が寄せられる。

昨年1月、母校である県北部の公立中学校に「性同一性障害の勉強会をしたい」と申し出た。校長の提案で今年3月から、教員向けの勉強会が始まった。校長は「苦しんでいる生徒がいるかもしれない。まずは教員が深く理解して、悩みを聞ける体制をつくっていく必要がある」と前向きに考えている。

GID（性同一性障害）学会理事長で岡山大学大学院保健学研究科の中塚幹也教授は、専用の相談窓口が全国的に少ない現状を課題に挙げる。その上で、「周囲の理解のなさから、いじめに発展する危険性がある。小学生の頃から心の性にも違いがあることを児童に伝えていくことで、自然と受け止めることができるのでは」と話している。

「声を伝えていかないと、自分たちの存在が普通と認識されない。いつか、自分たちが社会の枠組みや見た目に翻弄（ほんろう）されずに生きていけるように」。木部さんは当事者の思いを少しずつ、教育現場に伝え始めた。

（この連載は岩崎歩が担当しました）

2017年（平成29年）5月7日（日曜日）　埼玉新聞